



付属病院で実施している神経・筋難病の患者さんを対象としたロボットスーツHALの治療効果に関する研究が、第58回全国自治体病院学会の分科会推薦優秀演題に選出され、論文が「日本自治体病院協議会雑誌」に掲載されました

茨城県立医療大学付属病院リハビリテーション部理学療法士の仲澤 諒らは、2019年10月に徳島市で開催された第58回全国自治体病院学会において、付属病院で神経・筋難病患者を対象として行っているロボットスーツHALを用いた歩行運動処置を含めた入院リハビリテーションの効果を発表しました。全国の自治体病院から数多くの発表があったなかで、本発表がリハビリテーション分科会推薦優秀演題に選出され、その内容が「全国自治体病院協議会雑誌」に研究論文として掲載されました。



研究では、HALを用いた歩行運動処置を含めた入院リハビリテーションを行った神経・筋難病患者15名を対象に、このリハビリテーションの効果が入院前のどのような身体機能と関係があるのか後方視的に検討したところ、歩行耐久性の改善が入院前の動的バランス能力と関連があることが明らかとなり、歩行機会が減少して動的バランス能力が低下している患者ほど効果が高いことが示されました。



付属病院では、今後も大学とともに最新のリハビリテーションの研究を推進して、いち早く県民の皆様に効果を実感していただけるような診療体制を構築していきたいと考えています。

【論文名】 <リハビリテーション分科会推薦優秀演題>
神経・筋疾患患者に対するHybrid Assistive Limb®を用いた歩行運動処置を取り入れた入院リハビリテーションの効果

【著者】 仲澤 諒、吉川 憲一、古関 一則（付属病院リハビリテーション部）
松田 智行（理学療法学科）、四津 有人（医科学センター）、松下 明（付属病院診療部）
富田 和秀（理学療法学科）、河野 豊（医科学センター）

【掲載誌名】 全国自治体病院協議会誌 2020年5月号

（本研究の一部は令和元年度茨城県立医療大学プロジェクト研究および付属病院研究研修費の支援を受けて行われました）